

日本の災害専門家、アチェを調査



スランビ・インドネシア社で調査活動について説明する自然災害対策の専門家たち。後藤洋三氏（中央）、山本博之氏、西芳実氏。

日本とインドネシアの災害専門家がアチェで調査を実施した。JST-JICA の助成を受けた一行は、自然災害だけでなく、様々な専門分野の研究者から構成されている。彼らの調査は Ristek、LIPI、シアクアラ大学、ガジャマダ大学といったインドネシアの関係機関との協力のもとに実施されている。

8 月 20 日、自然災害対応の専門家である後藤洋三氏（東京大学）が文化・社会分野の専門家である山本博之氏と西芳実氏とともにスランビ・インドネシア社を訪問した。

後藤氏はアチェ住民に対して、自然災害がいつどこで発生するかに過剰な関心を向けるのではなく、すでに発生した自然災害から学ぶよう呼びかけ、「重要なのは、いつ災害が発生してもよいように常に意識を高め準備を整えることです」と述べた。また、アチェでの防災の経験がインドネシアにおける災害対応のバロメータとなりうると語った。

山本博之氏は、文化・社会の専門家として、2004 年末に起こった地震津波災害へのアチェ社会の対応や人びとの考え方について調査した。山本氏は、アチェで自然災害に対応する施設や環境は十分良くなっていると評価し、政府や住民がこれらの設備をいかに維持し活用できるかが現在の重要な課題であると述べた。「日本には日本の防災の経験があり、インドネシアにはインドネシアの防災の経験が蓄積されています。それぞれの経験を理解し、互いに活用できるようにすることと、現在ある設備を維持して活用できるようにすることが重要です」と山本氏は語った。

（『スランビ・インドネシア』2009 年 8 月 21 日付紙面より抄訳）

原文：<http://www.serambinews.com/news/pakar-bencana-dari-jepang-teliti-alam-aceh>